



Title	南亮三郎氏著人口理論と國際貿易
Author(s)	伊藤, 久秋
Citation	商業と經濟, 19(2), pp.221-226; 1939
Issue Date	1939-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/27122
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-14T18:26:15Z

南亮三郎氏著人口理論と國際貿易

伊藤久秋

本書は著者が過去三ヶ年にわたる人口問題研究の一成果として世に問はれたるものであつて、三年前人口理論と人口問題なる一書を公にせられたることを考へ著者の旺盛なる筆力に先づ感嘆せしめられる。本書は左の八章より成る。

- 第一章 マルサスの人口理論と歴史觀
 - 第二章 マルサスの増殖原理と性愛論
 - 第三章 人間完全化論争と世界人口
 - 第四章 人口謳歌論者グレーの人口論
 - 第五章 人口問題としての國際貿易
 - 第六章 國際貿易と人口扶養力の理論
 - 第七章 世界人口の趨勢とその再生産過程
 - 第八章 人口問題關係文獻の紹介批評
- 収録せられるものは何れも既に獨立の論文報告として公

表せられたるものであるが、第四章までは人口理論に關する篇、第五章より第七章までは、その應用論、詳しく云へば貿易と人口問題との關聯並に現實の人口の動きに關する論篇、第八章は人口文獻論評篇として考へることが出来る。今本書の全體にわたつて紹介論評することは出来ないが主要なる部分につき其素描をなすつゝ、間々論評乃至感想を交へて本書の紹介にかへたい。

第一章マルサスの人口理論と歴史觀の前篇はマルサス理論の一新解釋と題せられ、マルサスの人口理論は、増殖原理と規制原理の二つより成りたつとし、彼の人口理論は、此二原理に支配されながらの増加と減退と進轉と逆轉の周期的擺動の理論であると著者は論斷される。私は此解釋はマルサス人口論を最初の一二章の披讀に終らず其全卷に亘つて熟讀せる人々の全く同意し得る解釋と信する。殊に多

くの人々が讀むことを避ける所の、諸民族に關する彼の歴史的現勢的記述をも併せ讀む人は此點に何等の異論をもち得ないと信ずる。南教授が此事を明確にしてマルサス理論の性格を此點に突きとめられたることは多とすべきである。尙人口の原理とマルサスが稱するものを人口の不斷の増殖傾向を指したものと解釋されたのも私には異論ない。會て拙著に於て私は、『彼の所謂人口法則とは何を意味するかに就て彼自ら何等の明言をなさないが、彼の此出發點即ち「人口は食物を越えて増加せんとする絶えざる傾向を有す」と云ふ命題が、彼の所謂人口法則なることを推測することが出来る。』と云つた。(拙書マルサス人口論の研究、三八頁) 私が推測と云つたのは、マルサス自身、「人口法則とは云々」と云ふ形にて表現する所がないからであつたが、南教授は、第一版に於ては甚だ不明瞭であるが、後版に於ては明瞭に此事が意味せられてゐると論結されたのである。

第一章の後篇「マルサスの歴史觀」に於て著者は、多くの批評家によつて非歴史的と評せられて來たマルサスの人口

理論が十全なる歴史學的地盤の上に立つてゐると云ふ著者の前書「人口理論と人口問題」に於て詳説された所と關聯し、マルサスの歴史觀に就て述べられてゐる。學生の頃ギボンのローマ帝國没落史を愛讀したマルサスが、その人口原理論に於ても、人類の過去の歴史の檢討によつて人口原理の裏付を爲せることを述べ、マルサスが屢支配階級の利益の代辯者と見らるるに拘らず、マルサス自身は今まで書かれたる人類歴史が概して上層階級の歴史なるを慨し、下層階級の窮乏史に注意を向くる要あるを云つた所を引き來つて史家としてのマルサスの一面を傳へられてゐる。そしてマルサスの史觀上の立場は一種の唯物論の線に沿ふてゐることを指摘し、「マルサスの見たる人間は、絶えずその員數の増加に脅かされながら、益々多くの分量を必要とする物質的生存資料の獲得に驅り立てられてゐる人間であり、又彼の見たる人間の歴史は、一言にして場所と食物との爲めの鬭争としての歴史であつた」(四四頁)と述べられてゐる。私は南教授の本章に述べらるる限りに於ては別に異見を合せないが、マルサスの豊富な歴史的智識と彼の人口原理

との關係をも少し聞きたい氣がする。蓋し彼の人口原理は寧ろ彼の人類歴史の詳しき検討よりも前に成立してゐた如く思はれるからである。彼の原理は歴史からの歸納ではなく、寧ろ歴史は原理の實證として利用されてゐると思はれるからである。

第二章 マルサスの増殖原理と性愛論に於ては、マルサスの増殖原理を根據つける所の兩性間のパッションに關する詳細なる論述がなされる。南教授は此論述によつてマルサスの性愛觀、幸福の泉としてのパッションと其耽溺より生ずる所の惡についてのマルサスの見解を忠實に傳へられてゐる。それは皮相なるマルサス攻撃者を啓蒙するに足るのである。而て教授が此論述に於て力説せらるる所は、一方に於てマルサスは兩性間のパッションを constant となし、他方に於て又これを variable と見てゐると云ふ點である。すなはち一方に於ては其不變恒存性を主張し、他方に於ては既に第一版の當時から、特に理性による抑止の可能と實存とを承認してゐると云ふ點である。そして教授は、『一方にパッションの事實上の可變性を認めながら、他方におい

てその不變恒存性を假設的意義において主張』することは何等の矛盾ではないと云はれてゐる。

教授の此點に於ける説述の中で私の不審に思ふ所は教授が『豫防的妨げ』即ち結婚の一時的延期を性的パッションの一時の抑止と解されてゐる事である。此點から見ると教授は性的パッションを結婚として表はるる性愛に限らるる様である。併しかくしては、人が理性に従つた場合に、此豫防的抑制は『甚だ屢罪惡を生む』と云ふ意味を解し難いであらう。結婚を抑止することは常に性的パッションの抑止ではなく、亂淫 (irregular gratification) として發現し罪惡を生むこと屢々なるものとマルサスが解したことは、彼が道德的抑制の意味を説明せる所によつて明である。性的パッションはマルサスの用語で所謂 attachment to one woman, a virtuous attachment の場合よりも廣く promiscuous intercourse, irregular gratification を生み得る本能 (instinct, natural inclination) と解すべきが故に、此パッションが一時的にも明に抑止されるのは道德的抑制の場合のみである。南教授の説述を少くとも不明瞭と見るのは私の讀み違

ひであらうか。

次に教授は私との論争の一點に觸れ、理性による性的パ
 ッションの變容はマルサス人口原理の樹立に何等累を及ぼ
 さないと述べられてゐる。それは私が拙著に於て『若しマ
 ルサスが道徳的抑制の實行を容易なものと思はんとする
 ならば、彼は性慾の不易を否認しなくてはならない。併し
 是は人口法則の撤回を意味する』(マルサス人口論の研究二
 二二頁)と云つたことに端を發する論争である。南教授は
 性的パッションの恒存不變は假設的意義に於て成立し、實
 際に於ける其の可變性と矛盾しないと主張せられ、恰も
 それは『増殖原理が人口は食物よりもより、緩漫に増加する
 と云ふ反對の事實によつて覆へされ得ないと同じである』
 と云はれる。(九六頁)私は人間の內的抗爭に於てパッショ
 ンが容易に理性によつて抑止され得ると主張しながら、な
 ほかつパッションの恒存不變を云ふことを矛盾とするので
 ある。假設的意義に於て成立すると云はるるならば私は寧
 ろかかる假設は何の爲ぞと問ひたい。それは決して教授が
 『増加原理が、人口は食物よりも緩漫に増加するといふ反

對の事實によつて覆へされ得ないと同じである』と云はる
 るが如きものではないと思ふ。マルサスの人口論は自然
 (食物)對人類の相剋を説いたものであり、此爲に食物に對
 する人類の増殖原理を假設することは全く意味があるので
 あるが、若しパッションが人間の內的抗爭に於て容易に抑
 へられ得るならば、此パッションの『不變恒存性』なるもの
 を根據とする原理を假設することは何の用を爲すであら
 うか。マルサスはかのパッションが容易に理性によつて抑
 へられ得ないと考へてこそ、その人口原理を提出したもの
 であると私は解したのである。恰もそれは、人間に於て
 利己心が利他心よりも遙に強力であると見てこそ、人の利
 己心を前提とする經濟理論が現實の經濟現象を解明する原
 理として提出され得ると同じい。

第三章は人間完全化論争と世界人口と題せられ、マルサ
 ス對ゴッドウィン・コンドルセルの有名な論争、人類の
 完全化及び人間壽命の延長が可能なりやの問題より説き起
 して近時の世界人口が主として死亡率の低下により増大せ
 ることを諸家の説を引用しつゝ、論證し、死亡率低下は懸て

平均壽命の延長となつて現はれつゝあることを指摘し、ゴッドウイン・コンドルセーの考へたる人間壽命の無限的延長は依然として臆説たるを免れないが、或程度に於ける壽命の延長は着々實現しつゝあることを説かれてゐる。無論此章の目的は近時の人口増大が死亡率低下へ負ふ所以を明にする點にあつて、完全化論争に結び付けられたることは教授自身も云はるる如く、思付きに過ぎないが、それは良き思付きたるを失はないであらう。殊に行論の途中、マルサス人口論中に於ける生死統計の問題を取扱はれたることは良き試であると思ふ。私事を述ぶることを許さるるならば私はマルサス人口論を研究するに當つて、マルサスが用ゐたる諸文獻を検索することの有意義なるを思ひ、これを自ら企てんとして果たさなかつたものであるが、何人に對しても此事は可也の難事業であるとしても、せめて人口論中に於ける諸統計を再検討することは、今まで以上に學者の注意を要求してよいのではないかと思ふ。(Giblin) 其他の人々の研究はあるにしても)單なる感想として附言する。

第四章人口謳歌論者グレーの人口論は百頁に近き紙幅を

占めマルサス批評家グレーの人口謳歌論を詳細に紹介し批評される。私自身は教授の引用さるる如く會て此グレーの書を「觀察の淺薄と事實の相違」と評し、尨大なる著書に充満する臆説に辟易した手前、教授によつて今此人の著作が取上げられ而も詳細に論評さるるを見ては甚だ相濟まざる感がすると共に、又グレーの多幸を思はざるを得ない。然らば教授が此著者を評論さるるのは何の爲かと云ふに、それは單にマルサス反對者の根本的立場を浮出たしむる爲の學史的敘述の便宜の爲ばかりでなく、マルサス學説に對してその提起したる問題は、現代に於てもなほ依然たる未解決の人口理論上の一基本問題を衝いてゐると考へられるからである。一基本問題と南教授が云はるるものは、果して經濟が人口を規制するか或ひは逆に人口が經濟を規制するか、それとも又兩者の間には相互作用の關係が存するかといふ問題であつて、グレー其他人口謳歌論者よりする『マルサス論争の一戰線は——たとへその内容は如何に空疎であつたとしても——確かに人口理論上の一つの焦點には觸れてゐたのである』と論結されてゐる。此論結の爲には、

餘りに多くの勞力をグレーの著書へささげられたの感がしないではないが、教授自身は、經濟學的基礎理論から出發してグレーほど大膽に且つ一方的に、謂ゆる人口主義學說を展開しようと試みた者は他に存しないと考へられ、今まで多く紹介されることなき此人の著書に多大の勞力を注がれたものとして、その學的情熱に十分敬意を表すべきであらう。グレーの論評として此一章は、我國は勿論、如何なる國の學界にも未だ見ざる長大篇である。

第五章「人口問題としての國際貿易」に於ては、國際貿易により人口扶養力の培養せらるることを重點として、著者は日本人口と工業化問題にも論及される。資源に恵れざる日本の著しき人口膨脹は偏に其工業化、工業品の輸出によつて可能なることを暗示しつゝ、日本品に對する各國の門戸閉鎖が、増殖して行く日本人口に對する脅威であることとを論斷されてゐる。後篇に於ては、特にペンローズの「人口理論とその應用」によりつゞ、日本人の眞に必要とするものは、世界の他の國とのより自由なる貿易である所以を論述されてゐる。此篇は寧ろペンローズの著書の紹介であつ

て南教授自身の説は多く現はれてゐないが、ペンローズの説く所に大體賛意を表せらるることは推斷される。そして又それは我々も十分同意し得る見解である。我國工業最近の傾向からも論結し得らるる同一のことを、人口問題の立場から明證されたものとして注意すべきである。曰く自由貿易政策！

第六章モンベルトの人口論中の一章人口扶養力論の詳しく紹介であり、**第七章**は、ソングラス「世界人口—過去の増大と現在の趨勢」及びクッチンスキーの「人口増大の測定」等によつて世界人口の趨勢とその再生産過程を論ずる章である。何れも著者がマルサスを主とする人口理論の框内から出て、現實の人口問題に足を入られた記録である。最後の**第八章**に紹介批評される論著は、ペンローズ著「人口理論とその應用」、グラス著「人口増加戰」、スムレーヴィツチ著「新人口論」、岩波文庫版「マルサス・經濟學原理」、デル、ルスリング共著「人口資源及び貿易」である。

以上私は南教授の新著の謂はば筋書を傳へた積りであるが、却て實相の歪曲になつたのではないかを慮れる。併し少しでも紹介の役を務め得たならば幸である。